

平成 23 年 8 月 20 日

気仙沼市長 菅原 茂 様

気仙沼市南町およびその周辺地区の復興に向けての提案

(仮称) 気仙沼市南町地域復興協議会

村上力男、齋藤宏、小野寺幸雄

東北工業大学 気仙沼南町地域支援チーム

今西肇、猿渡学、福屋粧子、菊池輝

3 月 11 日の震災発生から、すでに 5 カ月が過ぎました。この間、復旧活動を拝見しながら、地域の皆様と一緒に、時には自宅に上がりこみ、時には地元のお寺でこの町の将来を話しこんできました。私たちができることは何だろうかと考え、この地区の未来を描こうと、浜見山から入り江を眺めておりました。

この地区にはすばらしい資源がいっぱいあります。だから、気仙沼の地域では一番先に開けたところでもあると自負しています。現行の法律に縛られることなく自由な発想をすると、そこには魅力的な空間と時間と人間があります。そこで、すでにご提案した第一案、第二案を基本として第三案を作成しましたのでご検討いただければ幸いです。

南町の将来の地域発展計画も含めた復興の基本的な考え方を記述しております。

1. 気仙沼南町周辺の復興に向けての基本的な考え

- (1) 数百年に一度の災害を災害として捉えない。自然現象として捉える。
- (2) 津波リスクを受け入れ、今まで居住・営業していた場所で活動できるようにする。
- (3) 地元住民の望む方向を具現化した地域復興地図をつくる。
- (4) 地盤が 60cm から 70cm 沈下しているのでかさ上げをする。その土材料は海岸沈下地域の一部掘削により得る。
- (5) 津波対策は、3m 程度までのものを考え、それ以上については物的被害を受容し人的被害をなくする。
- (6) 復興に当たりできる限り、地域からがれきや土砂を持ち込まない、持ち出さない。
- (7) 今後の観光資源の高度化（品質確保）を計るために気仙沼ブランドの確立と緑と海の空間を拡充する。
- (8) 今後の同地域の資源を生かすためには、現在の立体駐車場を撤去して自然と一体型の共同駐車場（平場）を設ける。
- (9) 特徴のある街並みをつくり、若者向けとファミリー向けの観光資源を創造する。
- (10) 海路を利用した新たな仙台からの交通の便を確保する。
- (11) 商業地でありながら高齢者などが暮らせる場所、歩いて買い物ができる便利な住宅も併設し、医療も含めて生活に必要なものがすべてそろう町

2. 気仙沼南町周辺の災害に対する考え方

災害は人災なのだろうか天災なのだろうか。科学技術を駆使して災害を防止しようとしたが、困難だった。その科学技術により守られていると信じていたため、本来持たなくてはならない「自己防衛本能」がきちっと機能しなかったかもしれない。

人間が生活をする限り自然といつも対峙している。（「自然」の反語は「文化」である。）そして、人間は科学技術の進歩を期待しながら自然と共存して生きていかななくてはならない。

- (1) 数百年に一度の災害を災害として捉えない。自然現象として捉える。
- (2) 社会と協調しながら個人の生命や財産は個人で守る意識を持つ。社会に頼りすぎない。
- (3) 今後 50 年から 100 年の科学技術の進歩を信じて、防災だけを考えない。
- (4) 災害に対するリスクマネジメントの考え方は、四つの方法がある。
 - ① 回避：リスクの原因となる活動を見合わせ、又は中止すること（逃げる）
 - ② 低減：リスクの発生可能性や影響を低くするための対策（防災、減災）
 - ③ 移転：リスクの全部又は一部を組織の外部に転嫁すること（保険など）
 - ④ 受容：リスクを受け入れること（被害が小さい場合など）
- (5) したがって、気仙沼南町周辺では、実行可能な低減処置をし、財産などは保険などをかけ、数百年に一度のリスクを承知でそこに住み経済活動をする。
- (6) 実行可能な低減処置とは、長大な防潮堤などは作らず、海岸から段階的に数メートルのかさ上げのみを行う。
- (7) 財産などは地震津波保険で対応する。この場合、新たに土地に対しても何らかの保険の新商品が必要となる。
- (8) リスクを承知でその場所にすむためには、生命の安全を最低限守らなければならない。そのためには、地下シェルターと避難道路の拡充が必要である。
- (9) 地下シェルターとは、かさ上げた土地の内部にコンテナ 1 個分程度の構造体を埋設し、緊急時に逃げ遅れてもその中に隠れることができるようにする。各住宅の地下や公民館の地下に設置する。この場合、最低限の食料・水。燃料の備蓄や個人の貴重品の保管場所としても利用できるようにする。構造などの詳細は後日検討。
- (10) 地下シェルターは、生活弱者が集まる場所である病院や養護施設などでは高層階を持つ構造物より避難の時間が短く効率的である。
- (11) 避難道路の拡充とは、この地域の特徴である海から周辺の丘まで伸びる複数の幅の広い避難道路のことである。これは海辺の景観を良くすることと同時に災害時の避難経路にもなる。
- (12) また、周辺の丘に登る空中遊歩道の充実を行う。避難住民が平地から丘に上がるための施設である。

3. 気仙沼南町周辺の経済復興のためのアイデア

復旧の足音は確実に高くなってきている。しかし、その後の復興に関しては、地域振興を含めて、今までの地域特性や歴史を踏まえてじっくりとしかし実行可能な方向で考えなくてはならない。以下のアイデアは、そのたたき台として披露するものである。

また、この地域は、商業地でありながら高齢者などが暮らせる場所を目指しており。歩いて買い物ができる便利な住宅も併設することを考える。そこに住む人が快適な空間として使えるように、南町周辺が一つの完結した集落とした発想の町でもある。それは医療も含めて生活に必要なものがすべてそろった町でなければならない。

3.1 南町の海岸に面した部分に親水型公園の拡充

- (1) かさ上げのために南町岸壁部の一部掘削を行い海を陸に引き込み、海岸公園を拡充し観光港としての風情を醸し出す。
- (2) ただし、気仙沼漁港は特定第3種漁港であり、利用範囲が全国的な漁港のうち、水産業の振興のためには特に重要であるとして政令で定められた漁港なので、管理者との協議が必要となる。
- (3) 海上レジャーを楽しむプレジャーボートの係留地としても利用する。
- (4) 掘削した土砂は、分別された廃棄物と一緒に南町地区の地盤のかさ上げに用いる。
- (5) 岸壁から50mから100m区間の緑地公園化。
- (6) 遊歩道および空中遊歩道を整備し、ゆったりとしたウォーキングを楽しみ、見晴らしのいい場所でゆっくりと過ごす。
- (7) かさ上げするため、上下水道や電気・ガス・通信などを共同溝を作って収納し、耐震設計によりインフラの整備をする。

3.2 南町、魚町地区に気仙沼本来のレストランモールの再興

「モール」の意味は並木やベンチなどのある遊歩道という意味です。

- (1) 安くてボリュームたっぷりの海の幸（若者・ファミリー用）を提供できる屋台や長屋（間口が狭いもの）が数十軒並ぶ「屋台モール」を作る。
- (2) 主な食材は、フカヒレ、夏はカツオ、秋はさんま、冬はメカジキなどで充実させる。
- (3) 絶品のひと口高級海の幸（熟年用）が味わえる割烹、すし通りなど「絶品モール」を作る。
- (4) ホテルの宿泊設備と地元飲食街のタイアップで、宿泊施設と飲食店の共存を計る。地酒通りをつくる。ソフトドリンクも地元の屋号風などのデザイン缶による販売

3.3 魚町、南町地域に若者向けのモールの創設

- (1) 屋号風の魚町と南町全体がモール化（遊歩道やショッピングモール）
- (2) 地域の若者向けおしゃれなアパレル関係の店と喫茶店などの「おしゃれモール」をつくる。

3.4 八日町地区のちょっと落ちつける芸術空間の創造

- (1) 全壊率がこの地区では最も少ないので、その街並みを利用して「芸術モール」をつくる。
- (2) 昔の町のたたずまいが残っているのでこれを利用して、回廊形式の美術品（絵画・彫刻・陶芸など）

を展示するギャラリーにする。

- (3) 三味線とジャズ、着物とジーンズが同居するオープンカフェ的な空間

3.5 住空間の充実、

- (1) 各店舗の上階には、住空間が広がることを目指す。
- (2) 夜になると人口が過疎になる地域ではなく、そこに住民がいることを考える。
- (3) 住民はこの地域の生活の質の高さを実感できる施設や商店により住みたいまちづくりを目指す。

3.5 交通の確保

- (5) 仙台港と気仙沼港を結ぶ定期航路開設と南町海岸公園の拡充
- (6) 1時間30分以内で仙台港と気仙沼港を結ぶ海の新幹船（ジェットホイールの就航）

以上、

活動記録

平成 23 年

- 5月5日： 第1回現地踏査・南町地域懇談会
- 5月11日： 第一次企画案提出
- 5月18日： 第1回チーム会議
- 5月25日： 第2回現地踏査・南町地域懇談会
- 6月1日： 第2回チーム会議
- 6月6日： 第二次企画案提出
- 6月7日： 気仙沼市役所訪問
- 6月10日： 第3回チーム会議
- 6月18日： 第3回現地踏査・南町地域懇談会
- 7月15日： 気仙沼市役所訪問、第4回現地踏査・南町地域懇談会
- 7月21日： 第4回チーム会議
- 8月9日： 気仙沼市役所訪問、第5回現地踏査・南町地域懇談会
- 8月18日～19日： 第6回現地踏査・南町地域懇談会
- 8月18日～21日： 映像記録チーム取材
- 8月20日： 第三次企画案提出・第5回チーム会議、第7回現地踏査・南町地域懇談会

本プロジェクトを支援しているチームの紹介

東北工業大学 新創造技術研究所「地域復興のための共同プロジェクト」事業

プロジェクト名：気仙沼市南町および南町海岸復興プロジェクト

主たる研究室：東北工業大学 工学部 都市マネジメント学科 地域共同研究室

研究代表：教授 今西肇（都市マネジメント学、地盤工学、プロジェクトマネジメント）

参加研究者： 猿渡学（経営コミュニケーション学科、映像）、

福屋粧子（建築学科、住環境、街の景観）

菊池輝（都市マネジメント学科、都市の交通）